

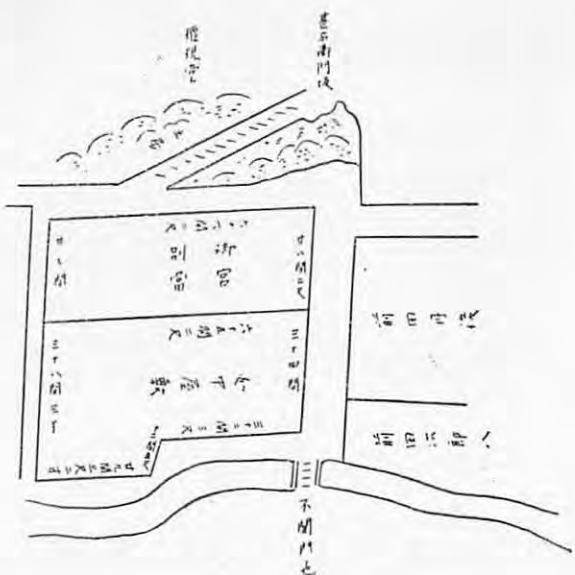
くに向ひて云ふ。中納言様今日私宅へ御腰を懸けさせ給ふ事、誠に篠原家の名聞扱々忝儀。たとへ申すも恐れなれども、我等は隠れもなき大摺切なれども、銀子千貫目拜領仕りたるよりも、日本大少之神祇忝奉存と誓言す。但し町人などは千貫目の方を取るべし。我等は萬貫目持にても町人をすべきとは思はず。假令、飢渴におよぶとも侍を可立とおもふ上は、金銀は不入と申したりと。政春云ふ。惣じて金銀道具を澤山に持ちて、京都へ引籠り町人を仕度しと云ふ人多し。侍の心中知られて、返すく笑止也云々。平次按ずるに、權現堂は所謂東照宮にて、金澤に創立落成は寛永廿年なり。利常卿社参し給ふは、正保元年五月下街道より歸城、金澤通行し給へる時の事なるべし。されば篠原織部が居宅へ腰掛け給ふといふも同時なり。此の居宅を算用場の近邊なる邸地の如くいへるは非也。又享保紀聞に、篠原織部は徒の者より萬石までの奉仕、何をさせても不足なき器量なりし。何にても新格を示談するに、成程それは拙子もよささう成る事と存す。しかし古格といふものは、跡々よりつかへ申す處もあれば、その所々にて捌き來り、只今は

つかへ申す事なし。新格は何程宜しき事にても、末々如何やうのつかへ有るべきも見えず。とかく古格の通りにて可然なり。物には天性といふ事有るなり。たとへを以て申さんに、大寺に旦那の人々二千・三千有之寺もあり。其の寺に一度に十人二十人の死人も可有之事なれども、終に其の死人を取置く事寺中指つかへ、二日三日葬送を斷り、指延したりといふ事をも聞かず。人の生死は人作の中々およぶ處にあらずといへども、天性にて如此なりと申しけりとぞ。右等の傳説共にて織部が爲人を知るべしといへり。按ずるに、其の爲人伶俐にて且實直なりしゆゑに、利常卿の御意に應じ、殊に其の素性を思召し、念頃にし給ひたるにやと聞ゆ。

○今井屋敷跡

延寶金澤圖所載如左。

按ずるに延寶元年の火事定書に、今井小屋と見え、正徳二年の火事定書には、女中屋敷とあり。三州志來因概覽附録に云ふ。今井第は其の初は篠原織部の第にして不開門内なり。寛文三年に不開門内に女房を作らせられ、今井を是に



居らしめらる。故に今井屋敷と呼べり。今井は清泰院夫人に傳する老女なり。

○老女今井傳

今井は戸田彌五左衛門方邦の娘にて、前田慶次郎利太主の外孫なり。三壺記に云ふ。前田慶次郎殿加州にて娘三人有り。一人は北條采女妻、一人は戸田彌五左衛門妻なり。今一人はおはななどのとて、利長卿妾の方なるを、小田彌右衛門に遣さる。戸田彌五左衛門に娘三人有りて、一人は清泰院殿へ奉公に出し召仕はれける。今井の方是なりと。又明暦二年九月清泰院殿逝去の條に云ふ。御在世中召仕はれたる女中、何れもさまをかへたる中にも、今井・松村・岩崎は公方様等への御使を勤めければ、暫く其の儘勤めけりといへり。按ずるに、松雲公夜話録に、天徳院殿御在世中金澤大火御城焼失の時分、春香院殿の御殿へ天徳院殿御立退なり。此の時の始末委細、今井と云ふ年寄女中覺え罷在り申し上げたり。今井は春香院殿に奉仕致したる由、享保八年五月八日の夜御意なりとあり。右火災は元和六年にて、此の頃春香院殿は北丸權現堂の地に居給へり。春香院殿は利